

久々に一人でタクシーに乗った。普段はあまりそんなことはしないが、今日は車で迎えに行きたかったのだ。だが、この後お酒を飲む予定だし、ちょっとだけ格好をつけてもみたかったのだ。タクシーは学校の校門の斜め向かいの駐車場に止まった。車を降りて、その場で待つ。片側一車線の車道と、それなりに広い歩道を挟んでいるが、この位置からでも待ち人を見分けるのに苦労はしない。校門で待つにしても、車が邪魔になるし、それに何より、校門の横で学生を待つのは恥ずかしい。もう授業は終わった時間帯で、三々五々学生がぞろぞろと出てくる。ふと校門の左手、歩道に目をやると、一人の女の子が立っている。その学校の標準服でも私服でもなく、どこかの中学校の制服だ。別に僕が制服マニアというわけではなく、オーケストラのコンミスの中学生という珍しい友人がいるからなのだが——と、よくよく見ると、間の抜けたことに、当の友人の女の子だ。向こうもほぼ同時に気付いたらしく、可愛らしい顔をほころばせ、こちらに手を振ってくれた。僕も控えめに振り返す。話しかけるために道を渡ろうか、どうしようかと数秒悩んだ直後、彼女が校門の方を向いた。こちらに小さく頭を下げてから、門の方に歩いて行く。彼女の待ち人は来たらしい。何人かの男女と談笑しながら出てきた、金

髪で赤い目が映える男子学生に彼女が声をかける。彼も僕の友人——以前の雇い主——だ。周りの男女に一斉にからかわれて否定するのに忙しいようで、こっちには気付かなさそうだ。わざわざ違う学校の校門で待っている女の子がいるという時点で気づきそうなものだが、何しろ筋金入りの天然なので大変そうだ。今度、彼の家に遊びに行く時に少女に声をかけてみようか。それにしても、世間は狭いものだ。

十分ほどだろうか、ぼんやりと学生の出入りを眺めていたら、待ち人——人ではないが——がやってきた。艶やかな黒髪のアートロング、緑の黒髪という表現がぴったりの大人びた、どちらかという美人という表現が似合う少女だ。何人かの友人らしき女の子達と楽しげに会話を交わしながら歩いて来た。口元に手を当て、小さくくすくす屈託なさそうに笑っているのが普段見ない表情で新鮮だ。僕は目立たない程度にそっと手を上げる。あざみも気がついたのか、友人たちに詫びるそぶりをしてから、一人でこちらに向かう横断歩道に立った。私服ではなく、学校の制服——厳密に言うと着用が義務ではないので標準服だが——を着ている。毎朝見ている服だが、やはりとてもよく似合っている。

「お待たせ」

タクシーに乗り込む待ち人、金屋あざみ。彼女は僕の同居人にして、彼女でもある。金曜日今日は、待ち合わせて夕食を食べに行くことにしていたのだ。タクシーの運転手に、発車を

お願いした。あざみの顔を知っているのだろうか、いくらかの学生がちらりとタクシーに目を向けた。視線を受け流し、学生をすり抜けるようにタクシーが走って行く。

「それで、今日は何を食べるの？」

「ステーキにしたんだけど」

「いいね」

予約するときに、予算をほぼ生のステーキだけに使ってほしい、と言った時の店の反応といつたらなかったな。それは現物を見せるまで内緒にしようと思いつながら、僕は手持ち無沙汰気味なあざみの右手をこっそり握った。あざみも特に何も言わず、僕の手を握り返してくる。タクシー内という私的でもない空間だからあまり公然とそういう会話もできないが、僕はあざみの体温を感じるだけで幸せだ。いい匂いもするし。

\*\*\*

二十分ほど経つたろうか、車が目的地に到着した。

「なるほど、ホテルのレストランね」

「評判がいいしね。それに、着替えも持ってきたし」

「いやに荷物が大きいと思ったよ」

僕の方だけではなくて、あざみの着替えもバッグに入れてきたのだ。ホテルには親戚の子と泊まるという話をしている。ベッドがツインなのだけが残念だが、まあ、それは仕方がない。

「それにしても」

いつも、家にいるときにだけ僕に見せる笑み。学校の友人には多分見せていないだろう、少し皮肉げな笑み。

「いやらしいこと考えてない？」

「考えてる。あざみが大好きだからな」

あざみが虚を突かれたという顔で黙りこんだ。少しして、顔を赤く染めて、眉を顰めた。

「……馬鹿。行くよ」

ふい、と向きを変え、先に歩き出した。からかいがいのある彼女も好きだ。置いていかれないように、僕は少し足を早めた。

\*\*\*

落ち着いた雰囲気の、高層階のレストラン。露骨すぎない程度の仕切りもあり、広々として

隣の客を気にしなくていい。しかも夜景付きだ。奥まった場所に席を頼んだおかげで、本当に他の客を気にせず僕たちは食事できていた。

「思ってた以上に、いいとこみただけど……」

「おごるから心配しないで」

「そこまで懐を疑ってるわけじゃないけどさ、もらってばっかりってのもね」

「今度何か食べさせてくれたらいいから」

「怖いね、それも」

くすくすと笑いながら、あざみはパンを食べている。僕の魚料理も勧めたが、「まだ人の分を取る時間じゃない」と断られた。まだ、というのが彼女らしい。あからさまにあざみの料理の方が少ない、質が落ちているというわけではないが、やっぱり僕より食べるあざみのためにもう少し量も張り込んでおけばよかったかもしれない。

「どうしたの、考え事？」

「いや、別に」

早め早めに出してもらったソルベはまあいいとして。料理について考えているのは、どのタイミングで僕の用事を彼女に切り出すかを考えているからだ。あまり表に出さないようにしていたが、僕がわかりやすいのか、彼女が鋭いのか。